【Zigzag-memo　No01】　珠玉の感動フレーズ

「歩きが仕事」の歩き旅現地の日々において、何かの不思議な力の作用を感じるようになる、どこからか激励の鼓舞が飛んで来るように感じた。私の意志を試すが如く様々な弱気に誘う魔性と荒魂が纏(まと)わり付いて来た中でも、何とか所期の志を貫き通すことが出来た、その原動力は何だったのか、そのような力はどこから湧いて来るのか、ふと思う処があった。私の力だけではなく、もちろん関係者人々の有形無形の支援もあったが、そういう人間的な力だけではなく、何か、はっきりと意識出来ない、見えない茫洋とした力が後押ししてくれたのではないか、と強く思う処があった。何度も感奮興起の波動が押し寄せて来る感を覚えた。

以下に記述のフレーズは、古賢先哲の声は、まさしく“　歩く旅人・へんろ人(びと)”の心と、へんろの舞台（フィールド）と共鳴するではないか！　私にとって、独(こ)（個）を立て、個を磨き、自己確立を図るための栄養素・エネル源である。私の人生を鼓舞してくれる名句は沢山あるが、特に以下に記述する天から垂れて来たフレーズは最高！　感動・感涙する。いずれからも迫って来るその精神は、その教訓の共通性は、崇高な荘厳性、真善美が調和している、珠玉(しゅぎょく)の金言に心の琴線が震える。これらは私が常日頃から意識している「あこがれ」に誘うフレーズである。

１．精神面に係ること

（１）私に対する叱咤激励の言葉

まずは３編の短い言葉である。

☀１；クラーク博士の［　Boys, be ambitious（少年よ、大志を抱け）　］

☀２；中世スペインの詩人サン・ファン・デ・ラ・クルス（十字架の聖ヨハネ）の詩

［　孤独な鳥の条件は五つ　］

一つ　　孤独な鳥は高く高く飛ぶ

二つ　　孤独な鳥は仲間を求めない、同類をさえ求めない

三つ　　孤独な鳥は嘴(くちばし)を天空に向ける

四つ　　孤独な鳥は決まった色を持たない

五つ　　孤独な鳥は静かに歌う

☀３；スッタニパータ（仏陀の言葉）

［　犀(さい)の角(つの)のようにただ独り歩め　］

（２）私が私淑(ししゅく)する安岡正篤(まさひろ)先生

心の師を一人だけ挙げよと言われると、私が敬慕して止まない私淑(ししゅく)する安岡正篤(まさひろ)先生である、読書も好きな中で、心の糧とする本、愛読書は、先生が渾身の力を込めた単行本 40 冊ほど、文庫本 15 冊ほどである。古今東西の聖賢の良書を取り上げ、ご自身の至誠と致良知の全力を投じて紹介している、色んな食材を入れた炊き込みご飯のようにしてくれる。特に日本精神復興をテーマに縦横無尽に喝破され、感動するきれいな言葉が散りばめられている。随所に薫陶化育(くんとうかいく)の情熱が溢れている、まさしく達徳明眼(たっとくめいがん)

の師である。毎日どこかしこのページを開けて食している。理想精神を涵養してくれる、警醒自覚の精神に誘う安岡正篤先生の教学が大好きである。先生は「一灯照隅行」をことあるごとに教化されている。

（3）実践的精神鼓舞を支える３人のフレーズ

＃１　サミエル・ウルマン（アメリカの実業家・詩人）の詩［　青春　］

以下は岡田義夫氏の邦訳である。　この［青春］を知ったのは50歳台になってからで遅かったが、無性に涙が出たのをはっきりと覚えている。　なお、年齢が若いのにも関わらず委縮沈滞の体を「若朽」という。

青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春というのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こういうものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

曰く、驚異への愛慕心、空にひらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に處する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。
人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。
希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇気と壮大、偉力の霊感を受ける限り人の若さは失われない。

これらの霊感が絶え、悲歎の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとざすに至れば、この時にこそ人は全くに老いて神の憐れみを乞うる他はなくなる。

＃２　王陽明の言葉

王陽明が起こした学問、「陽明学」の命題の一つである「**知行合一**」の精神が大好きである。「知は行の始なり、行は知の成るなり（知ることは行為の始めであり、行為は知ることの完成である）、行動を伴わない知識は未完成である」の意である。実践なき思想はいくら美辞麗句を並べても意味を為さない、それは空論という。**致良知（良心）を己に実現することが大事**である。知識と行動が表裏一体になることで生命活動は本ものになるという。陽明学は若き志士達に影響を与え明治維新の原動力にもなったと言われる。前出安岡先生は「身心（一如）の学」と言われている。医学博士の養老孟司さんは、人間生命の健全な活動は「知行合一」の概念と同相――入力・五感と、出力・運動の両機能は分離不可である

と話されている。　前出安岡先生は単刀直入に「知」は人間にとって付属物だと峻厳・喝破されている。私は現実的な暮らしにおいてはシンプルに「有限実行」の有りや否なやでその人間の価値量が決まるものと思っている。だって、口先だけ、知識だけは、調べさえすれば高卒の私でさえもそれ相当の便を偉そうに振りまくことが出来ると思っているから。知識層に多い文献知を振り回す知識偏重者は、社会では“頭でっかち”と揶揄される。　私は、特に「高・清フレンドリー古道」調査活動においては、素人目線を以って三現主義（現場・現物・現実）徹底に基づく体験智――三現智（三現＋知行合一）の展開を意識し、机上の空論・文献知を振り回さないように意識・留意している。

＃３　中国戦国時代の儒学思想家「孟子」の言葉

眼前に何らかの障壁が立ちはだかる時に思い浮かんで来る、天から降りて来る押背（おうせ）の信号、天からの叱咤激励の名句がある、若い時から知っていた。今世において、こんなフレーズを考えた人がいたならばパワハラだと誹謗中傷の矢面に立たされるかもしれないが。天からの叱咤激励と呼んだだけでは面白くない、受ける形で、山中鹿之介（山陰地方の武将・山中幸盛）、あるいは熊沢蕃山（江戸時代の陽明学者）が詠んだとも云われる、「憂（う）きことのなお此の上に積（つも）れかし　限りある身の力ためさん」（困難がさらにこの身に降り掛かって欲しい、限りある吾身の力を試したいものだ）が浮かんだ。逃げない姿勢、逃げてはならない、真正面から受け止めよ！と。

天の将（まさ）に是（こ）の人（ひと）に大任（たいにん）を降（くだ）さんとするや、必ずその心志（しんし）を苦しめ、その筋骨を労せしめ、その大膚（たいふ）を飢えしめ、その身を空乏（くうぼう）にし、行ないその為す処を払乱（ふつらん）せしむ。心を動かし性を忍ばせ、その能（あた）わざる処を曾益（ぞうえき）せしむる所以（ゆえん）なり。
（その意訳は）天がある人物に大任を下そうとすると場合には、まず、その人物の精神を苦しめ、其の人物の筋骨を疲れさせ、肉体を飢えさせ、生活を窮乏させ、その行動を所期の方向に背（そむ）かせ、食い違わせるものだ。それは、その人物の心を憤激させ、本性を耐え忍ばせて、これまで出来なかった事を埋めてさらには向上せしめるために、鍛錬をさせるものだ。

２．行動面に係ること

歴史上に名を遺した３人の廻国遊行から絞り出された生き様に傾倒・心酔する。

＃１　「吉田松陰」

吉田松陰
遊歴地図

幕末志士（長州藩）の一人。私が大好きな吉田松陰の心意気を象徴する二つの姿勢がある。

一つ目、松陰が松下村塾でモットーとした「飛耳長目（ひじちょうもく）」。

耳を飛ばして、目を遠方（長）に！　その意味合いは、遠方のことをも能（よ）く見聞する耳目を持って、物事の観察に鋭敏であれ、ふつふつ湧き上がる好奇心に従順であれ、と言うことだと思う。垂直指向の「高いアンテナを張れ」という教えもあろうが、私の及ばざる処。水平指向の「飛・長」を摘み出し、遠近の旅に出たいという心を重ねて学んでいる。

二つ目、司馬遼太郎の著書「世に棲む日日」にある一節。

「・・・松陰（吉田松陰）の旅は、このようである。ゆく先々の蔵書家から書物を借りて読み、人物がいると聞けばそれを訪ねて意見を聞き、いわば花から花へ移る蝶のように自分自身を移動させつつ、そのようにして蜜を吸ってゆく。・・・」

松陰の姿勢に感動するが、遼太郎さんの紹介が素晴らしい！　どこかの管理職や「何とか長」みたいに、デスクにしがみ付いて、「君、君・・・」と『指先と口先だけ』で部下を動かそうとする人とはまったく違う。　ところで、世は捨てたものではない、高山植物の花のように、今まで私の知らざる所で咲いていた花華（徳のある男）に出会いたく探し回ると、“ちゃんと居ります！　　時々”　稀有な新種を新発見！　“　である。

＃２　「六十六部」

六部とも、日本回国行者とも、日本回国大乗妙典六十六部経聖と称されている。元は日本全国 66 か国を巡礼しながら、１国１か所の霊場（必ずしも固定したものではなく、一之宮、あるいは国分寺、あるいはその他の社寺も含め）に法華経を１部ずつ納める宗教者のことをいう、いわば、国全土を聖地とみなす思想に基づいた巡礼とも言われている。自然や神仏に同調・同化したいと念じたのだろう。

「村山民俗第 36 号」（2022 年 7 月 16 日発行・村山民俗学会）の中に「流浪の六部　喜平治の行跡（市村幸夫氏著)」という段がある。

喜平治の行跡について、同書より簡潔に要点を抽出する。

・・・天保四年（1833）年、天童生まれの喜平治という男が六部として、廻国巡礼に赴き、九州は沓尾村に回った際、香圓寺から得度を受け、隣村の猪熊村の庵寺に起居することになる。俳句などを嗜み村人と交流を深めていたが、安政六（1859）年四月帰らぬ人となった。　・・・天保四年（1833）年八月に天童を立ち四年にわたる巡礼の途次、豊前国沓尾村に滞留・・・沓尾村に滞在すること八年・・・平凡な一人の六部の死は、多くの人の善意によって葬儀や後始末が行われた・・・

その中に次の和歌（連歌）が載せられている。

世の垢を　去バ涼しキ　雲の上　　順道（喜平治）

さしなき風に　蓮の香バし　　香圓寺（樂山）

私の直訳的な理解は次のとおり。『世』は娑婆・社会であろうが、『餘（われ)』をも勝手に重ねて解釈する。　*** 精一杯の六部活動や寺院奉仕の生き方を通して、煩悩を少しでも取り払うべく精進努力を続けて来た今、死に直面するこの時に至っても、雲の上に出たような気分――雲の上に出れば、塵埃のない清浄無垢の青空が一杯広がり、天空の夜空は星が煌めき、涼しきそよ風（さしてもない風、取り立てていうほどでもない風）に蓮の香ばしい匂いが乗って漂って来るような空気に包まれ、晴れやか・爽やかな心持ちになっている、悔いはない、思い残すことはない。***

喜平治の所期の志は、諸国の神社仏閣を拝禮・行脚し、無事帰郷することであっただろうが、遠地はるばる、旅の途次に縁が生まれ、そこで新たな人生を育み、そこに命を捧げるに至ったプロセスは、まさに幕末期の僧「月性」の生き方――将東遊題壁（まさに東遊せんとして壁に題す）――と一致するではないか。旅先で様々な人々との接触があり、自らの修行と共に、今でいう地域活動もしながら日本全国に仏道を広める利他行の実践だったのだろう。

＃３　「童財善子」

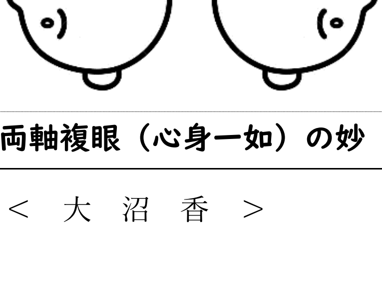
実在の人物ではなく仏教説話のキャラクターで、華厳経最終章「入法界品」に登場する求道物語の主人公である。場面は七宝で荘厳された祇園精舎僧園の中に普賢菩薩と文殊菩薩を上首とする法会から始まる。童財という少年が、仏道――悟り（菩薩）の境地を求めて、53 人の良き師友を訪ねながら修行の旅に出る。師とされる者は、菩薩・比丘・比丘尼・長者・女性信者・仙人・娘・少年・国王・商人・漁師・職人など様々な立場の人が修行する。最終段において、[51]弥勒菩薩（菩薩の最高位）、[52]文殊菩薩、[53]普賢菩薩に会い、つまり、初めに戻った、円環修行の末の原点回帰を以って終結としている。

例えば、最初の師「功徳雲比丘」は様々説いた後、“・・他に私の到底及ばない仏法が無量にある。そこで貴方は、次の善知識（師）を訪ねて行きなさい・・・“と諭した。次の師「海雲比丘」は様々説いた後、“・・私が会得している仏道はただこの一法に過ぎない。どうしてその他の行道を知ることが出来ようか。　次の善住という比丘を訪ねて行きなさい。・・・“と諭した。

童財を導くはずの師については、仏道を離れた人までも、社会的身分や職業の貴賤なく登場させ、それらの師も自らに謙虚であり、決して、自説が絶対唯一で正しいなどとする独善・傲慢な者は一人もいない、また、師が師をリレー式に紹介する。しかも、童財が教えを一方的に乞うのみ、師は一方的に教えるだけ、ではなく、共々に学び合う姿を描いている。立場・身分を超えて教えたり教えられたりである、まさに、太陽と太陰、お日様とお月様の関係、お日（陽）様は照らし、お月様は照らされて明るくなる。太陽は月に対し“もっと大きくなれ”とか、月は太陽に対し“もっと俺の方に強く当てれなどと言わない。”　あるがままを認め合い、強弱・優劣の関係は生じ得ない。赤心純真な少年の物語、何とも言えない素晴らしいシチュエーションである。まさしく、吉田松陰や六十六部の生き様とぴったり重なる。

＝＝＝

以上のように書き留めた内容から「師資相承」（師の教えや技芸を受け継いで行くこと）が浮かび、[彩色性多重人格］・「新型風見鶏人」・「Moving oval man（動的楕円形人）」と自称する私の性格と重なる感がある。「四国へんろの目的は？」については、「あこがれ」というキーワードを使っているが、特に、吉田松陰・六十六部・童財善子の生き方を真似たい、少しでも近付きたいとする心情でもある。
それにしても、天が垂れた珠玉の名言・金言は天来の教訓である、惚れ惚れする、心の栄養になる。
人生の真諦を求めんとする私の口癖「freedom（自由・無碍）　flexibility（柔軟・弾力）　fantasy（夢・希望）」に勇気を与えてくれる言葉である、とても有り難く思っている。　　下の図柄は上記を纏めて私の心の視線・視界を、心の軸たる心の根本中道をイメージ図化したものである。

敬慕・私淑する安岡正篤先生からの学びと共に		
精神面	（私）	行動面
サミエル・ウルマンの［青春］		**吉田松陰**
王陽明の［知行合一］		**六十六部**
「孟子」の［天の将に・・・］		**童財善子**
両軸複眼（心身一如）の妙		

＜　大　沼　香　＞

（end）